イスラームの基本

イスラームの宗教における基本は次に示す2つの句の宣言です。

(i) アッラー以外に信仰に値するものはない（ラーイラーハ・イッラッラー）。

(ii) ムハンマドはアッラーの使徒である（ムハンマドッラスールッラー）。

この文章は、シャハーダ（信仰告白）として知られています。この2句の信仰と証言を通して、人はイスラームに帰属します。それは信者の生涯におけるモットーであり、彼らの信仰、崇拝、存在など全ての基本です。この記事ではこの証言の最初の部分について述べていきましょう。

‘ラー・イラーハ・イッラッラー’という証言の重要性

最初に述べたように、この証言はイスラームという宗教において何よりも最も重要な部分です。というのもイスラームはタウヒード、または神の単一性と独自性の信仰の断言をするものとして成り立っているからです。そのため、この証言は“タウヒードの宣誓”とも呼ばれます。神のこの唯一性と独自性は、神のみへの崇拝と服従のために必要不可欠なものです。イスラームの宗教は基本的に人が神のみの法に従い、かれのみを崇拝する

という生き方です。イスラームは、神以外の何物をも崇拝しないことを強調しているただ一つの真の一神教なのです。それゆえ、私たちは預言者（彼に神のご慈悲とご祝福がありますように）の多くの伝承にもあるように、誰でもこの句を述べ、実践する者は永遠の楽園に入り、そしてそれに反するものは誰でも永遠に地獄の業火に留まると言われています。

この証言はまた、神のみを崇拝するという人の人生の目的を確認します。そしてそれこそは人の存在理由なのであり、人生における最も重要な側面なのです。アッラーはクルアーンの中でこう言われています:

> **“ジンと人間を作ったのは我に仕えさせるため”。(クルアーン 51:56)**

この証言に見られるタウヒードのメッセージは、イスラームにとって特異なものではありません。その重要さゆえ、このメッセージの本質と真実は全ての預言者によってもたらされたのです。人類の黎明期から、神は全ての人々と国家に預言者を遣わされ、かれのみを崇拝し、全ての偽りの神々を拒否するよう命じられました。アッラーはこう言われています:

> **“本当にわれは，各々の民に一人の使徒を遣わして「アッラーに仕え，邪神を避けなさい。」と（命じた）….” (クルアーン 16:36)**

このタウヒードの概念が人の心と精神に根付かなければ、人は喜んで神の命令と全ての崇拝行為をかれのみに向けて行うことがありません。預言者ムハンマド（彼に神のご慈悲とご祝福がありますように）が一人で13年に渡り、マッカで人々をタウヒードへと呼びかけ続けたのはこういった理由からです。そして当時は、最小限の崇拝行為のみが命じられていました。そしてこの概念が信者の心に確固たるものになった後、他の多くのイスラームの戒律が明らかとなったのです。彼らは自分たちの人生さえも喜んで犠牲にしました。もしこの基礎が欠けていれば、他のいかなることも益することはありません。

ラー・イラーハ・イッラッラーの意味

ラー・イラーハ・イッラッラーは文字通り、“アッラー以外に神はない”という意味です。ここで神という言葉が表しているのは、崇拝される全ての対象です。この証言が意図するのは、人間により崇拝されている他の神などがあったとしても、それらのいずれも崇拝に値するものはない、ということです。つまり真の唯一神以外はいかなる対象も、、神として崇拝される権利がないということなのです。

ラー・イラーハ...(崇拝に値する神はない...)

この二つの単語は全ての創造物への崇拝を否定しています。ムスリムは、アッラー以外のいかなるものに対しても、崇拝行為を拒否します。この拒否はあらゆる迷信やイデオロギー、生き方、または神的献身や愛、または絶対的服従を謳ういかなる権力者などにも及びます。神はクルアーンの多くの箇所で、人々がアッラー以外に崇拝対象としている全てのものは創造物であり、それらには何の力もご利益もなく、いかなる崇拝行為にも値しないと述べています。

> **“だが彼らはかれの他に神々を立てるが，それらは何も創れないばかりか，それら自身創られたもので，自らを害することも益することも出来ず，また死も生も復活も，自由にならない。(クルアーン25:3) ”**

ある人は、他の対象または存在を崇拝します。なぜなら彼らはそれが宇宙に働きかけたり、その力が利益や被害をもたらしたり、またはその存在自体が素晴らしっかたりするために崇拝行為に値し、特別な力を備えていると信じているからです。神は、風や、木々、石のような物体であれ、あるいはいかなる力を備えた人間、預言者、聖者、天使、王などの意識のある存在であれ、人々がアッラー以外のものを崇拝対象と認めるような概念を否定されます。それらは彼ら崇拝者と同様に単なる創造物であり、自分たち自身さえも助ける力がないのです。彼らは不完全さを備えた創造物に過ぎず、アッラーに服従しています。それらはいかなる崇拝対象にも値しないのです。

事実、多くの者は神の最高権力と支配を信じています。しかし彼らは神の天国を地上の王国のように想像するのです。ちょうど王に多くの大臣と信頼できる仲間があるように、彼らは「聖人’」や副次的な神々を、神への私たちの仲介者であると考えるのです。そして彼らにある種の崇拝行為や礼拝などを捧げることによって、神に近付くための仲介人とするのです。神は言われました:

> **“もしあなたが彼らに，「天地を創ったのは誰か？」と問えば，彼らは必ず「アッラー。」と言うであろう。言ってやるがいい。「それならあなた方は考え ないのか？アッラーの他にあなた方の祈るものたちは，もしアッラーが私に対して災厄を御望みの時，かれの災厄を除くことが出来るのか？またかれが私に対してご慈悲を御望みの時，かれの慈悲を拒否することが出来るか？」言ってやるがいい。「私**

は，アッラーがいれば万全である。きちんと信頼しようとする者 は，かれを信頼する。」” **(クルアーン 39:38)**

実際のところ、イスラームには仲介者など存在しないのです。どのような人も崇められず、またどのような存在も崇拝されないのです。ムスリムはアッラーだけに直接、全ての崇拝行為を捧げるのです。

...イッラッラー(...アッラー以外には)

いかなる創造物も崇拝される権利を有さないことを否定したのち、シャハーダは‘…**アッラー以外には**’と述べることで、アッラーのみのための神聖さを断言します。クルアーンの多くの箇所でアッラーは、いかなる創造物も利益や害をもたらす力を備えてはおらず、それゆえにいかなる崇拝行為にも値しないが、アッラーは唯一全宇宙を所有し支配されるお方であり、かれのみに崇拝される権威が属するのだと述べています。アッラーのみがかれの創造物に供給し、全てを支配するのです。かれのみが益や害をもたらすことができるのであり、必ず現実化するかれの意思を止めることは誰にも出来ません。このようなアッラーの完全さ、その最高の権力を通してのかれの全支配と偉大さゆえに、かれは全ての崇拝行為と礼拝、崇敬に値するのです。

“言ってやるがいい。「天と地の主は誰であるのか。」言ってやるがいい。「アッラーであられる。」言ってやるがいい。「あなた方はかれの他に，自分自身に さえ益も害ももたらせないものたちを保護者とするのか。」言ってやるがいい。「盲人と晴眼者は同じであるのか。また暗黒と光明とは同じであるのか。彼らはアッラーが創造されたような創られたものを，かれと同位に配する。それで彼らには創造の意味が疑わしくなったのか。」言ってやるがいい。「アッラー は全てのものの創造者であり，かれは唯一にして全能であられる。」’” **(クルアーン13:16)**

神はまたこう言われます:

あなた方は，アッラーを差し置いて偶像を拝し，虚偽を捏造しているに過ぎない。あなた方がアッラーを差し置いて拝するものたちは，あなた方に御恵み を与える力はない。だからアッラーから糧を求め，かれに仕え，感謝しなさい。あなた方はかれの御許に帰されるのである。” **(クルアーン29:17)**

そして神はこう言われます:

> **誰が天と地を創造したのか？また誰があなた方のために，天から雨を降らせるのか？それでわれは，美しい果樹園をおい茂らせる。その樹木を成長させる ことは，あなた方には出来ない。アッラーと共に（それが出来る他の）神があろうか？いや，彼らは（正しい道から）外れた民である。” (クルアーン27:60)**

アッラーのみが崇拝に値する唯一の存在であり、かれ以外の何か、またはかれと共に何かを崇拝することは大変な間違いです。全ての信仰は真の神性のみに向けられるべきです。そして全ての願いはかれを通してのみ求められるべきです。全ての未知なる恐れはかれからであるべきで、そして全ての希望はかれにのみ置かれるべきなのです。また全ての神聖な愛はかれゆえに抱かれるべきで、全ての嫌悪はかれゆえの嫌悪であるべきです。また全ての良い行いはかれの愛顧と喜びのために行わなければならず、全ての悪事は彼のために避けられなければなりません。このような方法でムスリムはアッラーのみを崇拝します。そしてこのことからも、私たちはイスラームの宗教全体がいかにこのタウヒードの証言に基づいているかを理解するのです。